

電
気
ア
ン
マ

あ
の
子
の

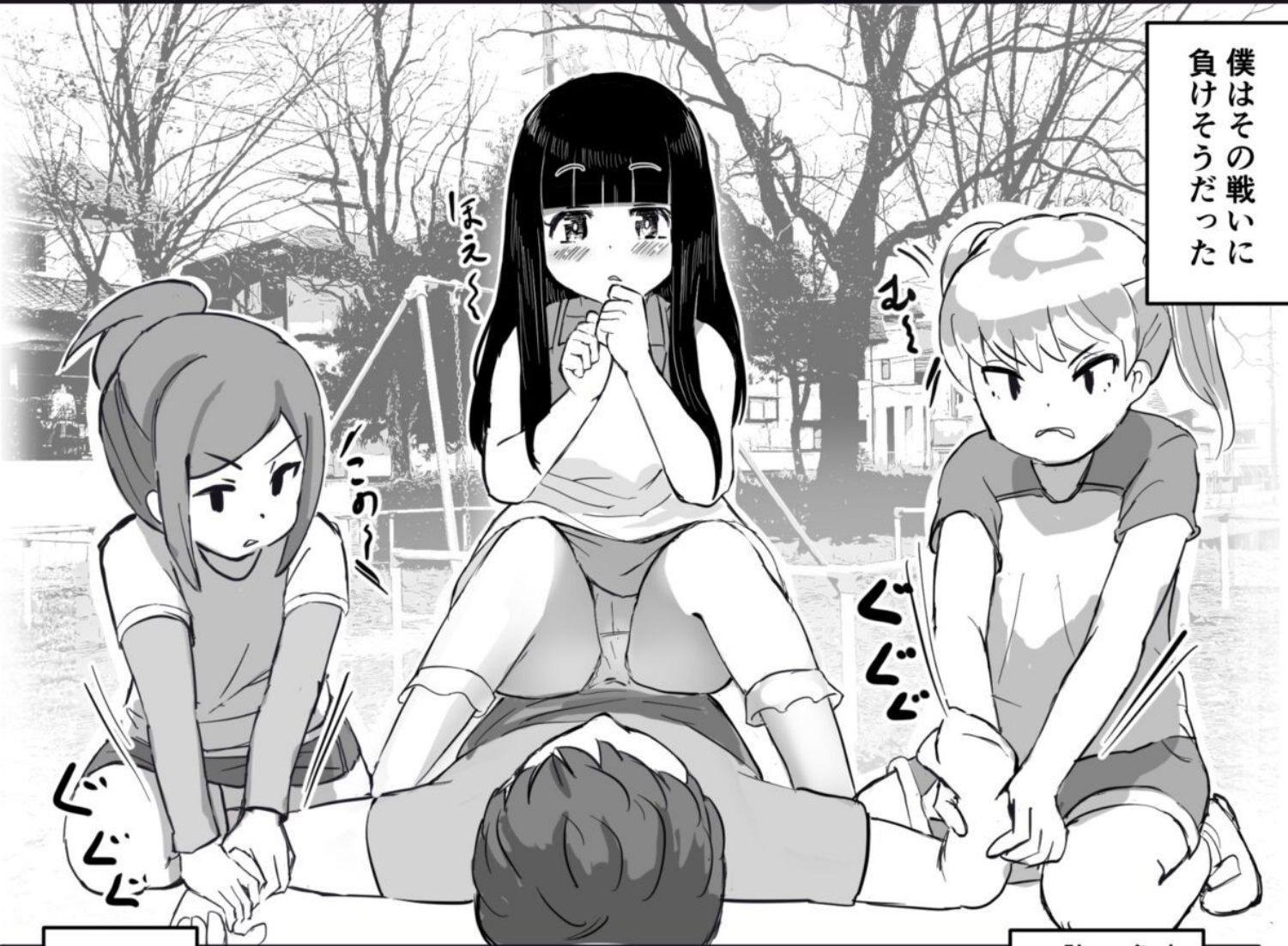


ある年の夏休み
ぼくはトラブルに見舞われていた

むにゅ

遊び場を巡っての
男子と女子のグループの衝突だ

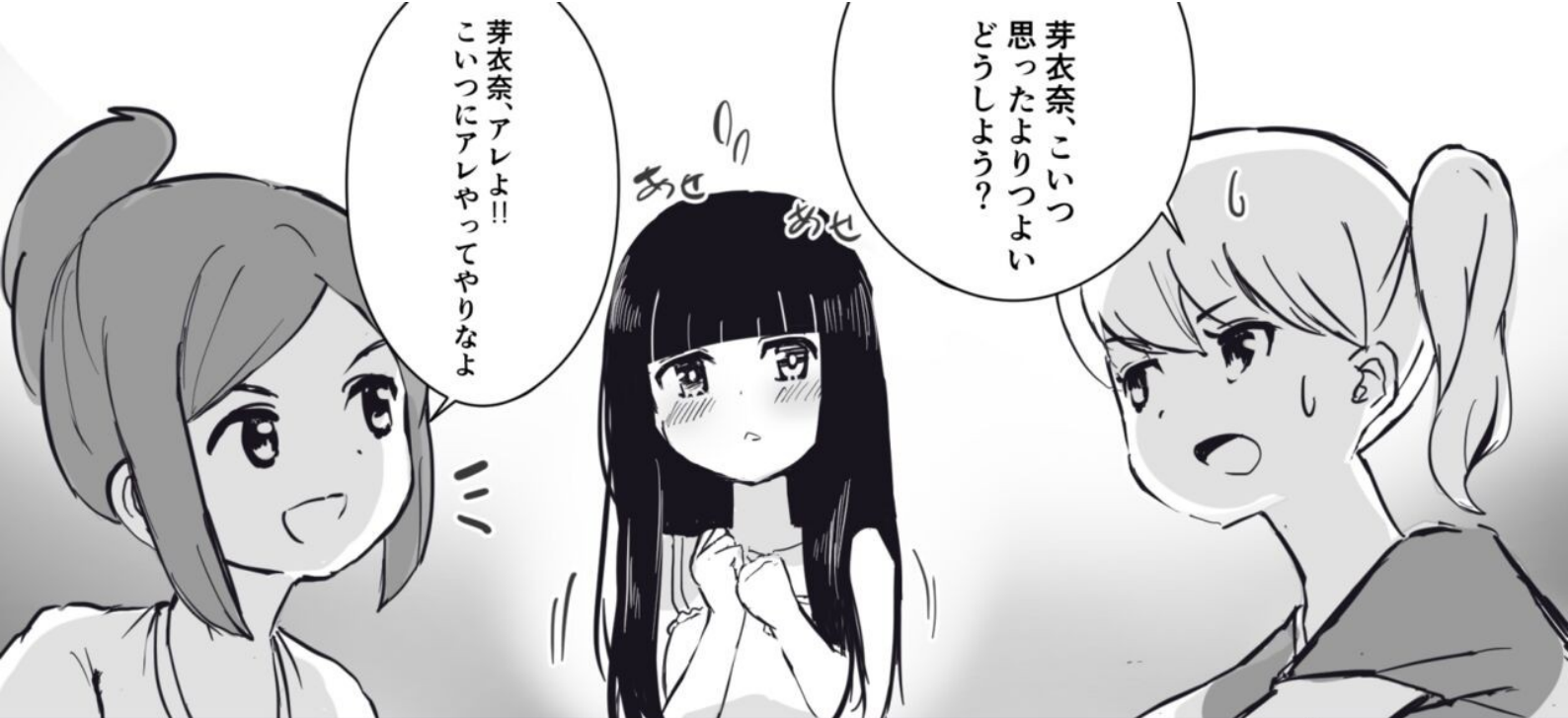
僕はその戦いに
負けそうだった



友人2人は早々に
負けてしまっていた
いかにもスポーツできそうな
強気な女子2人にキンタマを
ノックアウトされたからだ



残された僕は3人相手に
押し倒されながらも
必死に抵抗していた



のしかかっていた女子が
急に僕から立ち上がった

すると僕の足を掴んで
股を開かせた



そして電気アンマを浴びせてきた

相手の女子3人の中で一番弱くて
鈍臭そうな女の子なのに
僕の股間を足で踏み締めることに
全くの遠慮がなかった



そうして股間を
足で振動され続け
僕のペニスは否応なしに
尿意を掻き立てられていった

僕は必死にもがいた
しかし2人がかりで
抑え込まれていて
ビクともしなかった
よりにもよって
1番弱そうな女子に
電気アンマされる屈辱が
僕を奮い立たせたが
一向に抗えない

芽衣奈の電気アンマ
すごいでしょー

悔しそう

もっと
やっちゃうぞ



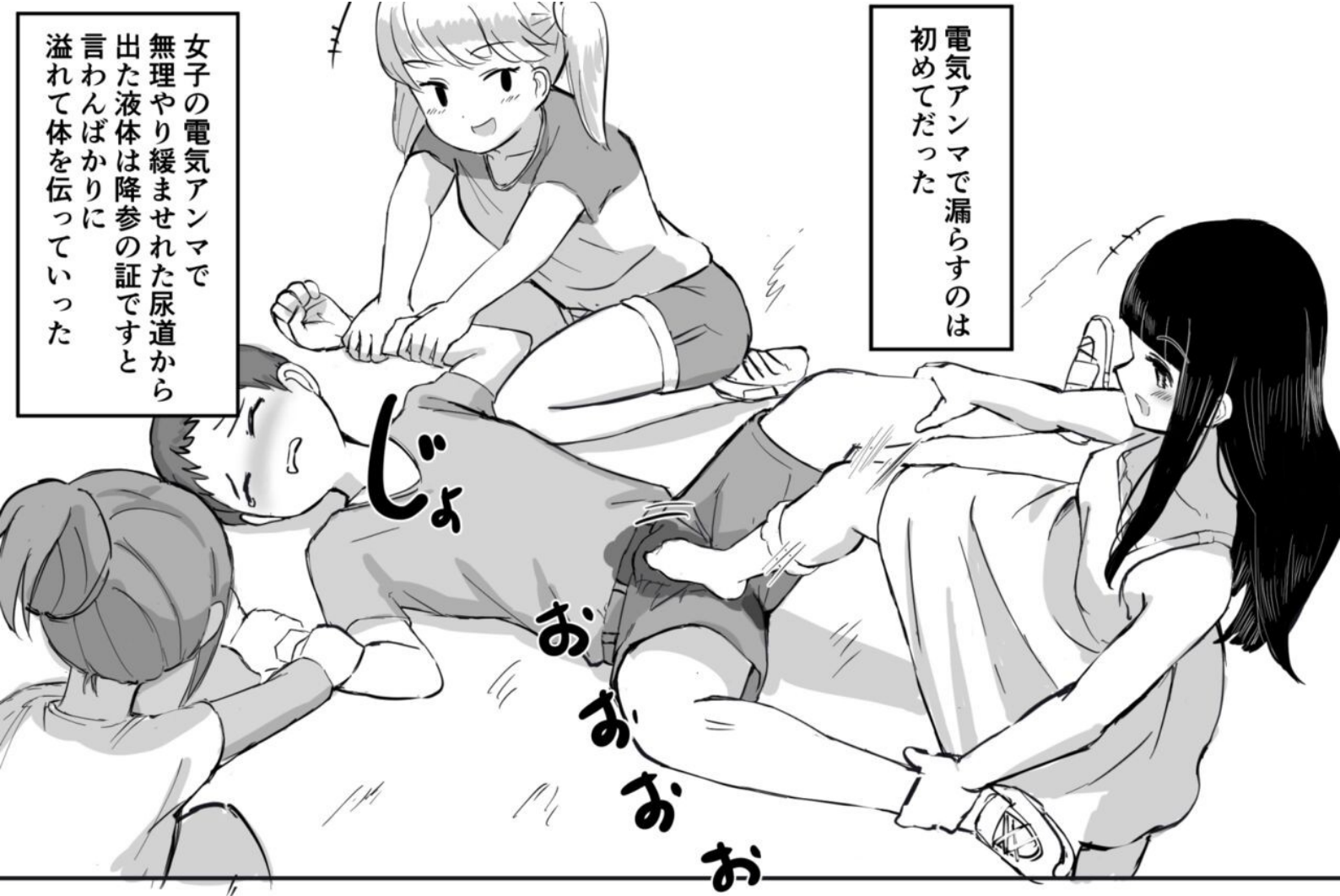
靴は脱いでいてくれた。
だが逆に彼女の足裏の柔らかさを
嫌でも感じてしまう

その柔らかさは僕という男が
女の子の身体に屈服させられる
悔しさを象徴するものだった

♪

電気アンマで漏らすのは
初めてだった

女子の電気アンマで
無理やり緩ませれた尿道から
出た液体は降参の証ですと
言わんばかりに
溢れて体を伝っていった



はい
あんたたちの負け

負けたんだから
あっちで
遊んでよね

女子相手なら
負けるわけがないという
無意識のプライドを傷つけられ

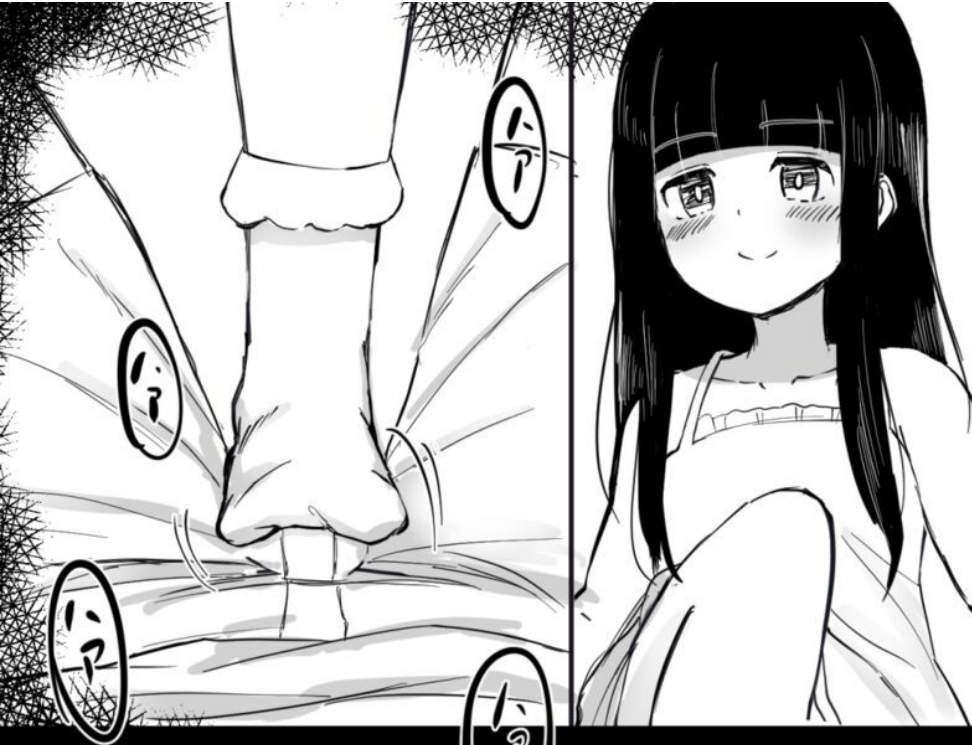
僕はショックで
口が開かなかった

ただただ負け犬らしく
おしっこで濡れたパンツを
履いたまま家に逃げ帰った

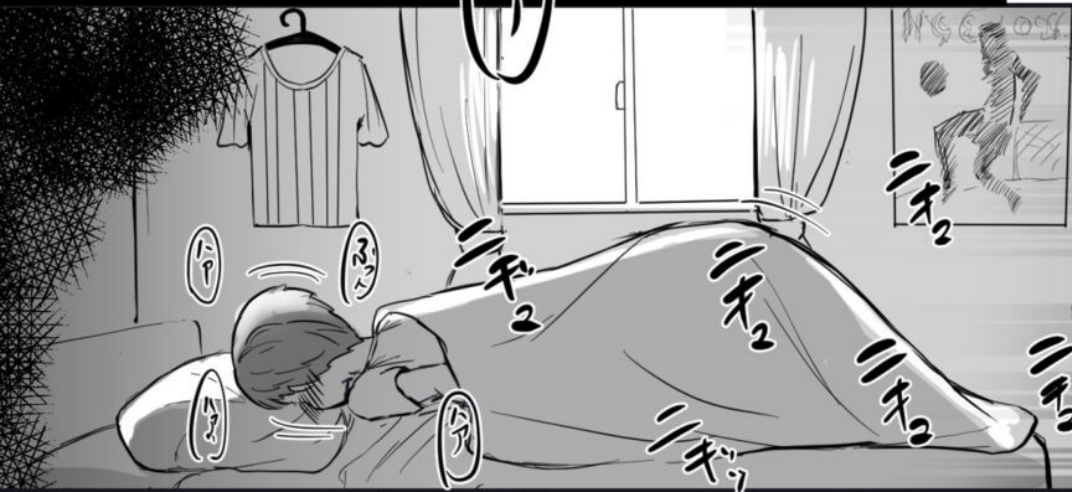
ずん

そしてその日の夜





屋間のことを
思い出すと
股間がやけに
ムズムズした



むず痒いアソコを
手で揉むと
もっと揉みたくなった
そして揉むのが
やめられなくなった



ちらっと見えた白いパンツ
ズボン越しに触る足の裏

アイツにされたことが
何度も鮮明に思い出す



よく見たら
結構可愛い顔

こっちを嘲笑う
憎たらしい表情

くそっ
手が止まらない…

びくんと短く痙攣して
今までにない刺激が
僕の体を貫くと
むず痒さは収まっていた

はっと我に帰った
おちんちんを弄って
気持ちよくなるなんて
変態だ！
こんなの絶対おかしい

それもこれも
アイツのせいだ
絶対にやり返す
僕はそう誓った

そうして
しばらく経った
ある日

アイツだ!
アイツがいた
しかも1人で



僕は開口一番に
リベンジを
申し込んだ



ええ〜〜…
私1人じゃ男子に
勝てっこないよ

案の定ビビって
まごまごしている
当たり前だ
女子なんて僕の
敵じゃない



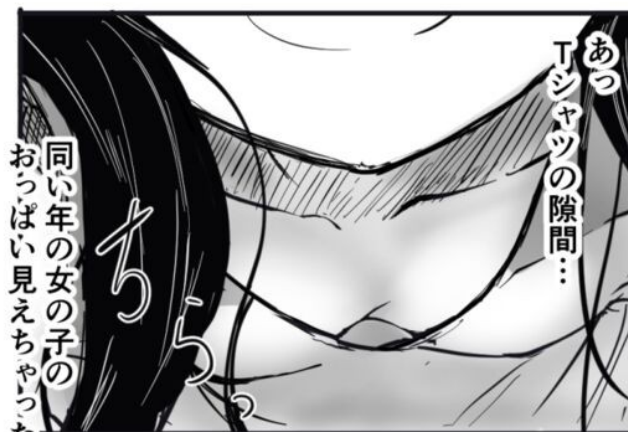
僕は一方的に
掴みかかった

こいつ全然弱っちいし
このまま押し倒して
全身砂だらけに
してやる
そのつもりだった

問答無用!

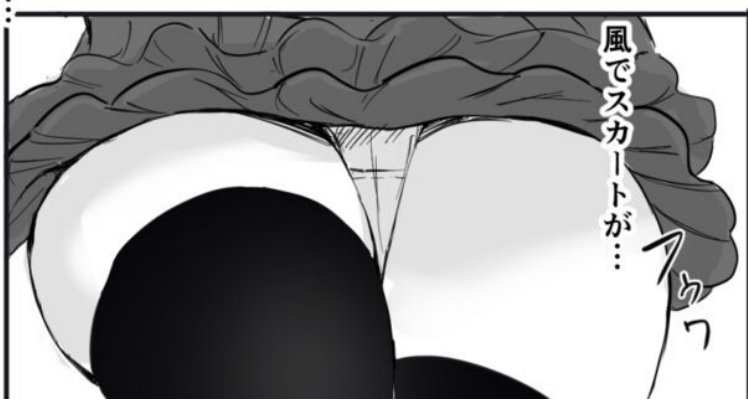


あつ
Tシャツの隙間…



同い年の女の子の
おっぱい見えちゃった…

風でスカートが…



このときの僕は
コイツの手柔らかくて
温かいな…とか

おっばい
見ちゃったら
チカンだ
…とか

女子が顔真っ赤にして
僕と押し合ってるの
なんだか胸が詰まるな…

そんなことが
次から次へと
頭をよぎっていく

思えば女子と
こうして互いが
触れるって
滅多にないよな

いや、この前
触れ合ったじゃないか
コイツのせいで僕は
ヒドく恥ずかしい思いを
したんだって

そう、こいつの電気アンマで
僕は…僕は…

電気アンマで…
お漏らしさせられて…

このままやったら
あっさり僕が勝っちゃう

ありえない話だけど
もし、今回も負けたら…
この子に電気アンマ
されるのかな…

でも、そんなことにな
ったとしたら
僕は…僕は…

僕は怪しまれないように
自然に力を抜いて
彼女に押し倒された
電気アンマの誘惑に
僕は屈してしまった

つまり、自分より弱いはずの
女の子にわざと負けたのだ

ダメだとわかってるのに
僕の頭はすでに彼女に
電気アンマされることで
いっぱいになっていた

女の子に…
本当に…
負けちゃった



私の勝ち



こいつはこいつで
僕がわざと負けてやったのに
少しも疑ってない…

でも、それでいい
あとは僕が、ごく自然に
提案すればいい



男子って思ったより
全然弱いんだね

アレを言うんだ…
アレをするようにって

お、お前の勝ち
だからさ…



罰ゲームでさ
電気アンマ…

しても
許してやるよ…



我ながら苦しい提案だと思った
電気アンマされたいの
バレませんようにと願った



全く疑われることなく
電気アンマされた



彼女の足が震わせられると、
その淫猥な刺激に応えるように
僕のペニスが固くなっていく

絶対勝てるはずの相手に負けて
こんな恥ずかしいことを
お願いしているのに

なにその声？
おっかしい

どうして僕は
目が釘付けに
なってしまうのだろう





しんお...

うあああ

ド



ド



たらく

ちよっと白いけど
これって...

ひん
ひん

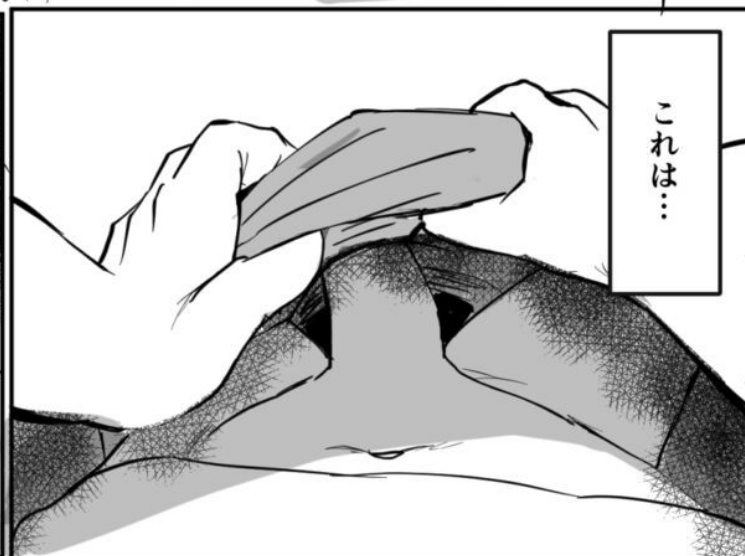
あはははあゝ
またお漏らししちゃったゝ



僕は我に帰ると急いで
ズボンの中を覗いた
これまでのおしっことは
明らかに違うものが出た気配が
あるからだった



これは…



精液だった…
彼女の電気アンマで
精通したのだ
しかし当時は性知識がなく
困惑するばかりだった

いけないことをした
天罰が下ったのだと
僕は思った



あれ？
男の子っておしっこ白いの？



うわああああああ
見るなってえ！



ふふん、まあいいよ
これでどっちが強いかわ
はつきりしたでしょ

分かったら2度と
私に逆らわないこと
いい？

正気が戻ってくると
恥ずかしさと後悔が
胸に込み上げてくる

ぎゅ

どうしてあんなに
電気アンマされたかったのか
僕は取り返しのつかないことを
してしまったのだろうか

でも、あの子と電気アンマの
ことを考えるのがやめられない

私の勝ち

うっ…

うう…

くそっ

恥ずかしくて悔しいはずなのに
あの子の電気アンマを
思い出しながら
ペニスを手で刺激するのが
止められなくなった



まいた？

それから彼女に会うたびに
勝負を挑んでは
わざと負けまくった

♪
よっあぐい
私の胸を

また負けるに
ちたの？

乳首いぢり〜♪

男子って
こんなに弱かったんだ

ぶうぶう〜

んん

びん

バ

バ

そして負けるたびに
電気アンマの罰ゲームを
するように誘導した

おもろしちゃうぞ

また出た〜♪

キョウのは
白いだねえ

えいこえいこえい
電気アンマで負けたら

どぶるん

ううっ

びゅん



お漏らし発射あゝ
はっずかしゝ

完全に彼女の電気アンマの
虜になっていた

あははっ
おしっこ出たであゝ

靴下も脱いで欲しいのゝ？
しょうがないなあゝ



ひゃるるるるるる

そして何日も経った
ある日

うぐぐぐぐ

あぐ

相変わらず君って弱いよねえ
もう私に勝つの諦めたらいいのに

つ、次はぜってえ
負けねえ

もうそれ
聞き飽きたよ

そんなことよりさ
あっちで登り棒やろうよ

電気アンマをされる為とはいえ
顔馴染みになったことに
変わりはない

僕たちは敵対的な関係から
次第に打ち解けていった

はやくー

彼女は僕の後ろ暗い欲望など
お構いなしに振る舞っている
対して僕は、完全に異性として
意識していた
長くて艶のある黒髪、握ったら
柔らかい手、屈んだ時に見える
胸、電気アンマされる時に覗く
白いパンツ、そしてズボン越しに
感じる彼女の足裏…

スッ

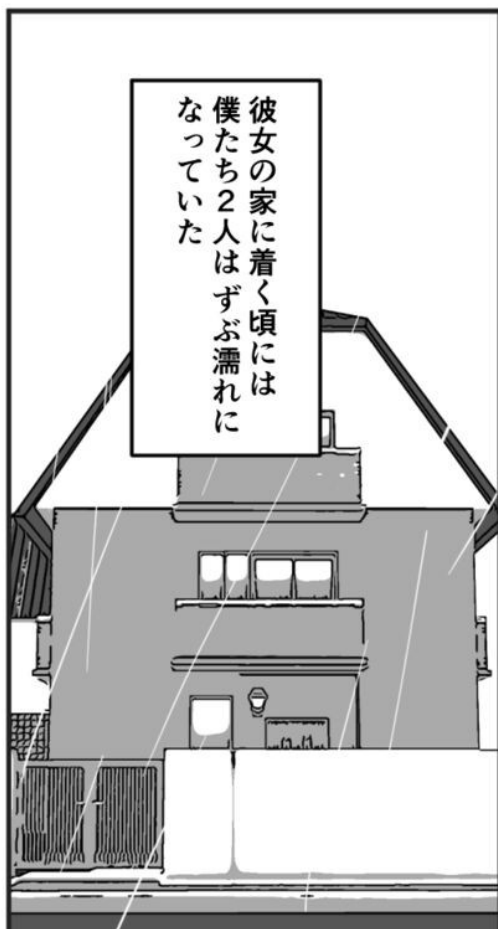
イラッ

来て来て
夕陽がきれいだよ

彼女の無邪気を自分の
変態な欲求に利用していることは
友情を裏切っている気分だったが
僕は彼女に電気アンマされるのを
やめられなかった



彼女の家に着く頃には
僕たち2人はずぶ濡れに
なっていた



ねえ、
私の家で遊ばない？

お、おう

雨宿りしていても
雨が止む気配は
一向になかった

その日はすぐに
天気が崩れてきた





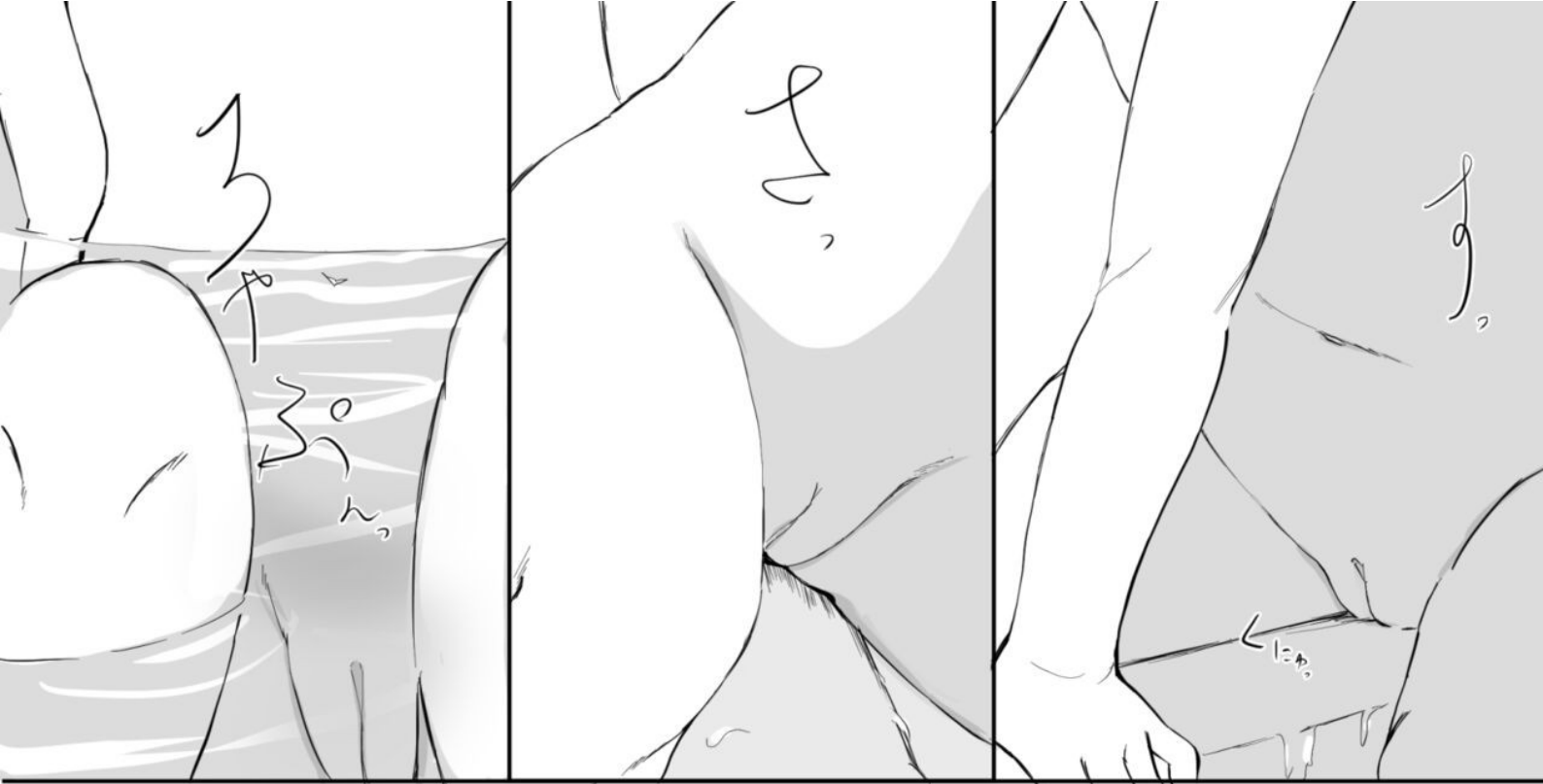
当然彼女の親には
風呂に入って
温まるように
言われた

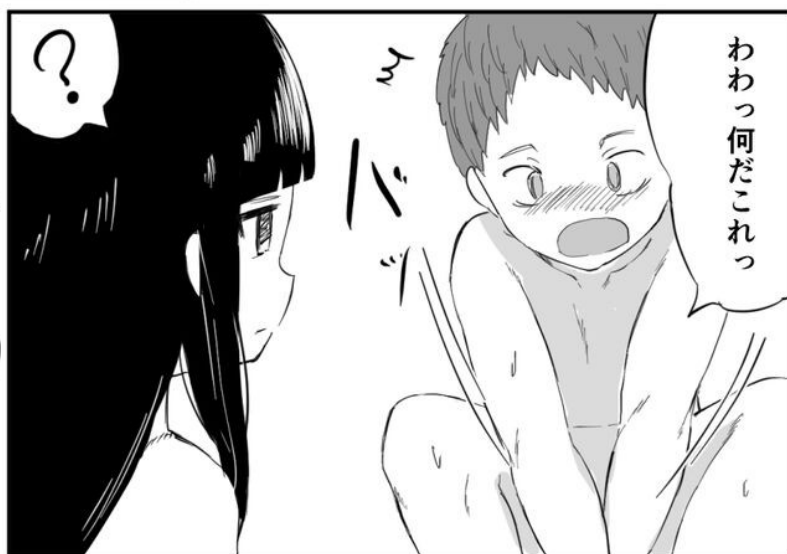
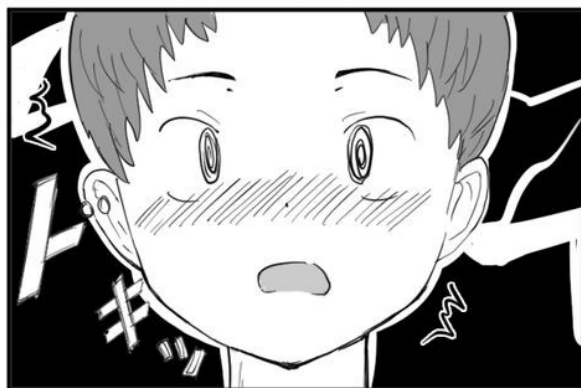
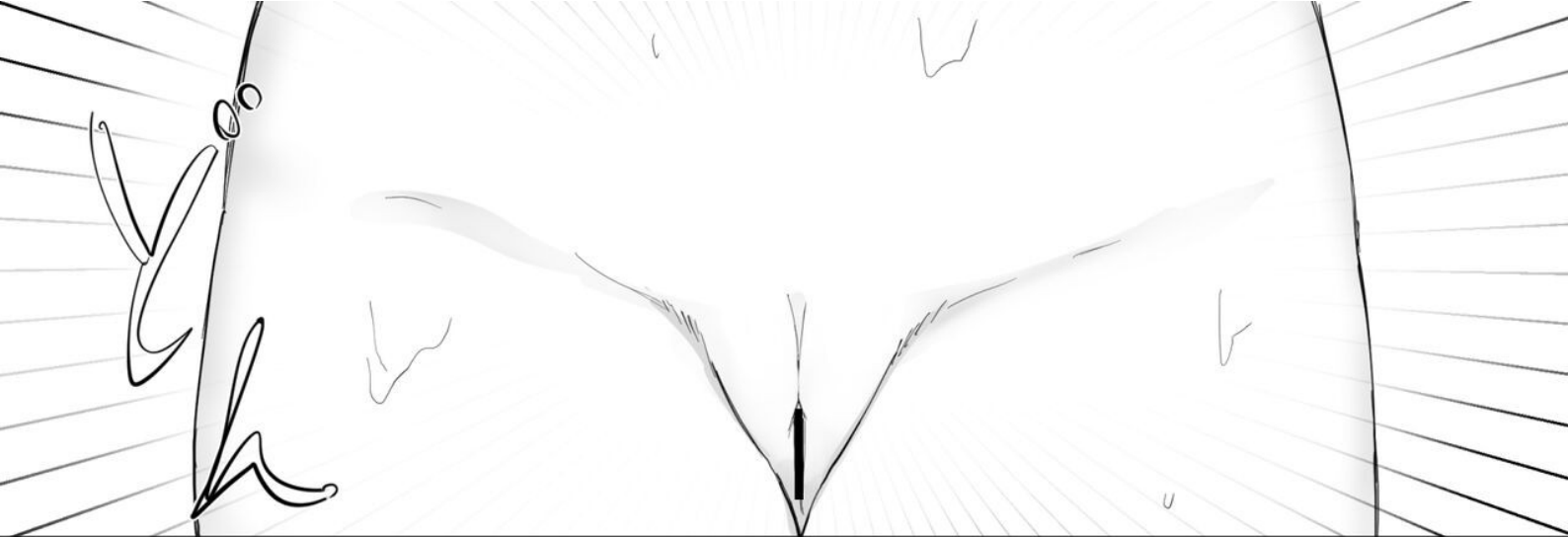
入ってけ

Mom

当時、僕らの歳なら
男女一緒に入ることは
何もおかしくなかった

微かに膨らんだおっぱいと股にある
割れ目、濡れた髪が張り付く肌…
同い年の子の裸というだけで
こんなにもドキドキするのは
どうしてだろう







なあに？
対抗するの？
今まで1回だって
私に勝てたこと
ないくせに

お、おまえなあー
俺が本気出したら
どうなっても
知らないからな!!

この時ばかりは僕も手加減抜きで
押し返そうと決めた。
今までわざと負けていたことが
ここでバレるに違いなかったが
この格好で負けると何もかも
取り返しがきかない気がした

これ以上こいつに
調子に乗られて
たまるか

おらああ

しにゃっ...

しん、このっ

くそおおお

はなでさ

くし

くし

しん

ふっ

ふっ

ばた

俺が本気出せば
こんなやつに
絶対負けたり
なんかしない...

な
何だろうこれ...
お股擦れて...
気持ちいい...

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

彼女の手を全く押し返せなかった
僕はいつも手加減してわざと
負けていた…ハズだった
最初の頃こいつ弱そうだと
思ったのは彼女が喧嘩を怖がって
いたからだだった
お互いが本気出すなら
僕は彼女より弱かったのだ

露わになった受け入れ難い事実を
必死になって覆そうとする
僕を嘲笑うかのように
彼女の陰唇は僕のペニスを
いじめ続けていた



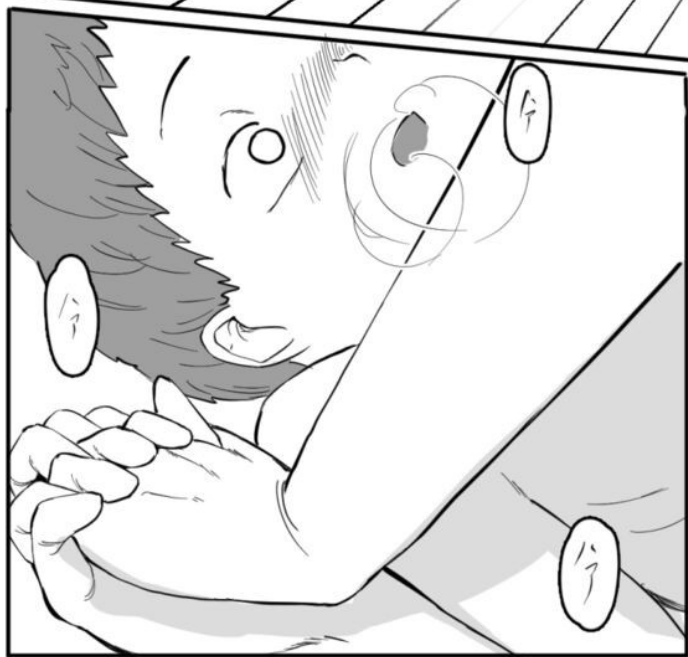
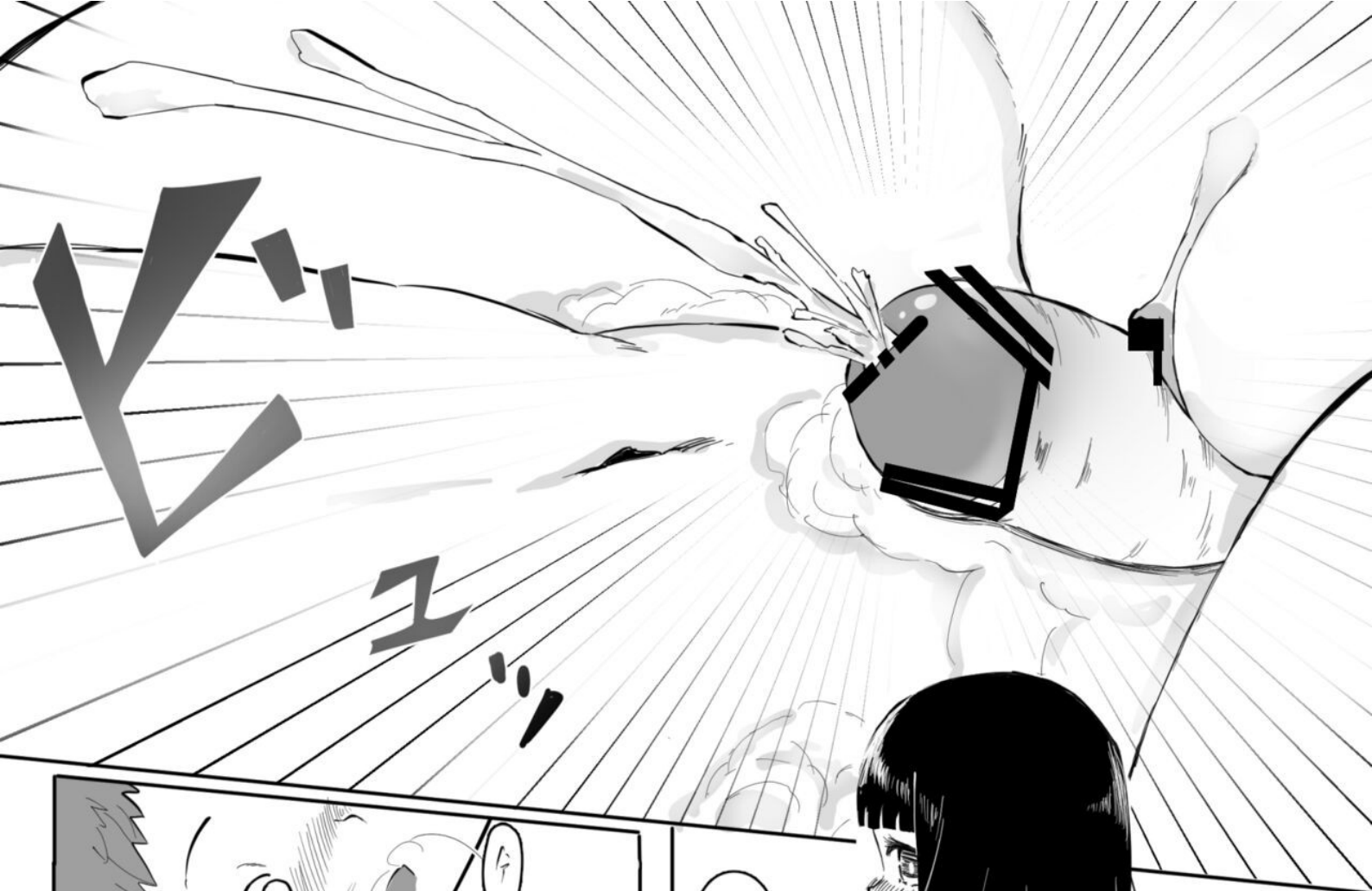
あはっはあ
や…やつぱり…
きみ弱いじゃん

あんっ…
悔しいの…?

女子に負けてばかりで
悔しいから
おちんちん硬くなるの?

ねえ教えてよ
ほらほらほら





射精していた
彼女のマンコに執拗に
責められて

女性器にさんざん翳られて
力尽きたペニス
まさに今の僕そのままだった

とろお...

へえ、男子の
おちんちんって
こうなってるんだあ

んくハ

え、なに言ってる

電・気・ア・ン・マ
いつもしてるじゃん

ほら、今日も私の
勝ちだから
罰ゲームだってば

がし

ねえねえ さっきの
びゅーってやつすごかったね
もう1回やってみようよ

電気アンマしたら
出るとこ見られるかな



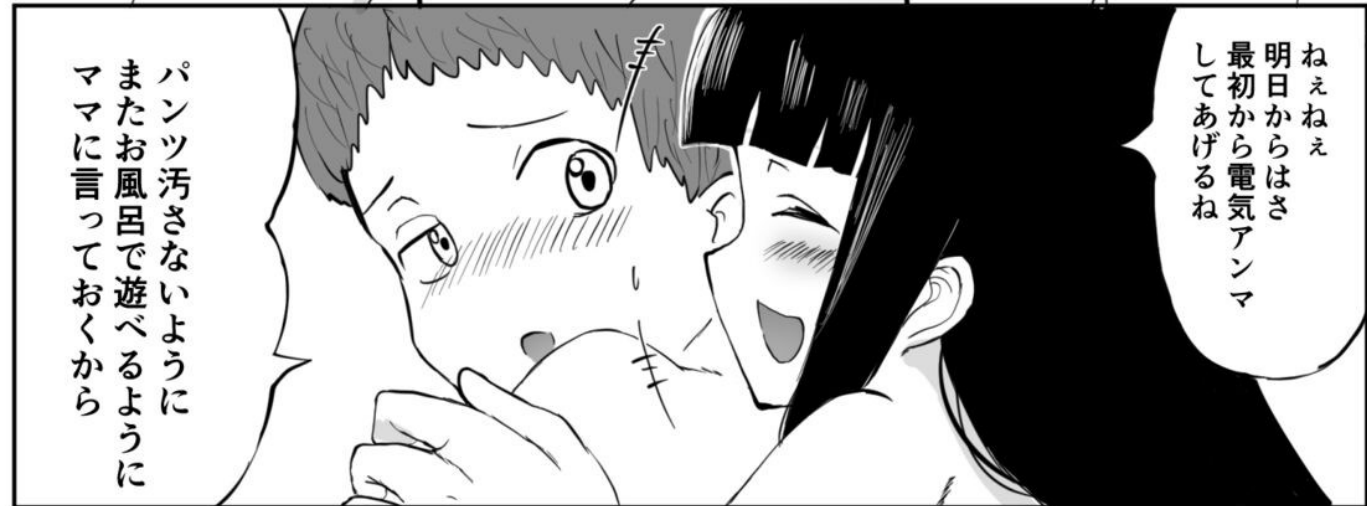




男の子のお漏らし
すっごーい



わあお…



ねえねえ
明日からはさ
最初から電気アンマ
してあげるね

パンツ汚さないように
またお風呂で遊べるように
ママに言うておくから



ねえ
元気ないの？

あいや

別に…



そして時は流れて
僕たちは大人になった



僕の電気アンマへの
欲望は思わぬ形で
叶えられることと
なったのだった

てっきり彼女に
軽蔑され嫌われるかと
思っていたのに
意外だった



いつもの教室で
待ってるから
来てほしい









僕に電気アンマをしてくれたあの子は
恋人になっても足で虐めてくれる
最高の彼女になってくれた

電
気
ア
ン
マ

あ
の
子
の





電
気
ア
ン
マ

あ
の
子
の



